

Women's sports

女性のスポーツ大会の 実態と問題点（下）

高橋義彦

前回に引き続き、「実践スポーツクリニック——スポーツから見た年代別・性別スポーツ指導」（文光堂発行）より“女性のスポーツ大会の実態と問題点”の項をご紹介します。



5. 女性のスポーツ大会の課題

当初人気のない女性スポーツが人気を集めるために、バレーボールの選手がレオタードを着て試合をしたり、バドミントンの試合では「女性には女性のユニフォームがあるべきだ。女性らしさを出すためにも」「日本人のスタイルに合っている」（1990/2/1朝日）という理由で、ショートパンツからスカートへの着用強制などの試みもなされた。しかし、「スカートで賛否ラリー」（1990/2/1朝日）のような論争を起し失敗に終わった。また「パンチラ卓球 お客はたった10人」（1985/12/7 日刊スポーツ）という報告があったり、「セクシーな衣装はほどほどにして」（1988/12/10日経夕刊）のように国際スケート連盟が、女子のフィギュアの選手の衣装を規制する記事もある。「規制あれど、水着は武器」（1988/9/30 朝日）にはシンクロナイズドスイミングの水着の規制ルールを取りあげている。

このように女性のスポーツ大会では競技自体よりも他の面で話題になることがみられる。

近年、学校の体育の授業でも、身体検査を男女が一緒に教室で行うことや、体育の時間に男女が同じ教室で着替えることなどの問題も取りあげられている。

最近の写真の投稿雑誌の人気に支えられて、大会にカメラを持参して競技に関係のない写真をとる通称「カメラ小僧」がいる。全国高校総体の新体操の会場の記事（1983/8/6朝日）や甲子園のチアガールの下半身を撮影し、フィルムを没収されるという事件（1986/8/19 サンケイ）も新聞で報道されている。

主催者は、大会において多くの参加選手の着替え場所

や神経をはりつめずにいられる控え室のような空間の確保が重要であり、選手に向けられる観客の視線から選手を隔離するよう配慮した大会運営が望まれる。

このような、女性に配慮したスポーツ大会の開催には女性の大会役員や女性の審判、指導者を多く養成し、スポーツ大会に多くの女性の意見が取り入れられるシステム作りをしていかねばならない。

6. 女性のスポーツ大会の医療スタッフ

女性のスポーツ大会で多くの人を驚かせたのは、1985年の東京国際女子マラソンではないだろうか。この大会に参加していた旧東ドイツのワインホルト選手は競技中の30 km過ぎに突然生理が始まったが2時間36分29秒で完走した。ランニングパンツにははっきりと生理血がにじんでいた。テレビでは、対応に困り、上半身を中心に中継がなされた。大会の主催者側も当初、「生理ではなく、出血性の下痢」という発表をしてしまい、あわてて「下痢が誘発しての生理」と取り消すという事態も発生した。これは、本部の医療スタッフなどの手ちがいであろう。

では、オリンピックの医療スタッフはどうなっているのだろうか。1992年の第25回オリンピック競技大会報告書には諸外国選手団の医療スタッフの構成が調査され、医療班の外観について次のように報告されている。

選手数に対する医務スタッフ数は、医師の数ではフランス、スイス、イギリス、日本などが多く、内訳は各国とも整形外科医が多く、次いで一般医（general）、内科医の順である。理学療法士（PT）ではドイツ、フランス、スイス、カナダ、イギリスが多く、日本は最も少ない。トレーナーは任意資格ながら制度化されている米国だけが多く、そのほかの国では少ない。国際的な医療資格外の登録人員では圧倒的に日本が多く、その内訳は鍼・灸師、マッサージ師などの資格であり、日本の特徴が現われている。この点については、①理学療法（士）についてのスポーツへの積極参加、②トレーナー制度の充実等、国際化社会の中で日本としての対策が必要であらう。

女性の選手に対する配慮として、女性の医療スタッフの充実が望まれるが、この点については日本は遅れている（表1）。

表 1 諸外国選手団の医療スタッフの構成(本部に所属するスタッフ)(1992大会より)

	選手数	医師	P T	トレーナー	合計
カナダ	311	男 4	6		10 (50%)
		女 1	9		10 (50%)
韓国	247	男 2	2		4 (50%)
		女 1	3		4 (50%)
イギリス	387	男 6	2		8 (57%)
		女 0	6		6 (43%)
日本	263	男 4	2		6 (86%)
		女 0	1		1 (14%)

表1によれば、カナダ、韓国では、半数以上が女性スタッフである。しかし本部に所属するスタッフとして日本は1名しか登録されていない。

フェミニティ・コントロールも医療スタッフにとって重要な任務である。また、ドーピングについても、ドーピングの問題を選手に教育し、何よりも指導者や、医療

スタッフが連携して監視していかねばならない。

7. 女性スポーツ大会のその他のスタッフ

東京オリンピックまでの日本選手団のメンバーには、女性選手の世話をするシャペロンというスタッフが採用されていた。シャペロンとはフランス語で侍女の意味で女子選手の世話をする女性のことである。

その後は、一時、採用がなかったがソウルオリンピックでは、日本水泳連盟が小笠原悦子氏(WSFジャパン会員/編集部注)を競泳支援役員として再採用している。女性選手が大会期間中、体調をくずしたり、また緊張や不安による精神的な悩み等に対処するため、男性のコーチだけでは打ち明けにくいことがある。その時にシャペロンが母親や姉のように世話をすることは重要な任務である。(おわり)

※文中、編集部が加筆しています。なお、新聞資料提供はWSFジャパン事務局

〈参考資料〉

日本女子選手の参加種目と人数(夏季オリンピック)

	1928	1932	1936	1948	1952	1956	1960	1964	1968	1972	1976	1980	1984	1988	1992
陸上	*	*	*	+	*	*	*	*	+	*	*	+	*	* 6	* 9
水泳	+	*	*	+	*	*	*	*	*	*	*	+	*	* 15	* 17
体操	+		+	+	+	*	*	*	*	*	*	+	*	* 9	* 5
ヨット	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	* 2	* 3
フェンシング	+	+	+	+	+	+	+	*	+	+	*	+	*	* 5	* 1
カヌー				+	+	+	+	*	+	+	+	+	+	* 2	* 3
馬術					+	+	+	*	+	*	+	+	+	* 2	+
バレーボール								*	*	*	*	+	*	* 12	* 12
アーチェリー										*	*	+	*	* 3	* 3
漕艇											+	+	+	+	* 2
バスケット											*	+	+	+	+
ハンドボール											*	+	+	+	+
ホッケー												+	+	+	+
自転車													*	* 3	* 3
射撃													*	* 5	* 3
卓球														* 2	* 4
テニス														* 2	* 4
柔道															* 7
バドミントン															* 6
実施競技	5	4	5	6	7	7	7	8	8	9	12	13	15	17	18
日本参加競技	1	2	2	—	2	3	3	7	3	6	8	—	8	13	15
参加人数	1	16	17	—	11	16	21	61	30	38	61	—	53	68	82

注記：ヨットと馬術は、男女の別なく参加できる競技となったときからここに入れた。+は、実施競技。*は、日本の参加競技。(第13回日本オリンピック・アカデミー・セッション資料に加筆)